子どもたちの未来のために

萩原北中学校 三年 二村 美緒

三十対一。この数字が何を表すか分かるでしょうか。これは、保育士一人当たりが担当する四・五歳児の割合です。つまり、子ども三十人に対して保育士が一人ということです。その保育士の配置基準が七十六年ぶりに見直され、二〇二四年度から、二十五人に一人になるのです。五人減っただけです。果たしてこれは、適した数字なのでしょうか。私は、保育士の人数がまだ少ないのではないかと思います。

昨年の夏、私は近隣のこども園に職場体験に行きました。川遊びの手伝いや地域の夏祭りのみこし作りにも参加し、小さい子と触れ合う機会が多くありました。

「お姉ちゃん、遊ぼ。」

と声をかけられ、私の緊張も少しほぐれた職場体験。年少クラスに入ったのですが、子どもの人数は二十五人程度で、保育士は三人。保育の環境が充実しているようにうかがえました。しかし、実際は、朝から子どもの受け入れをしながら、遊んでいる子の様子を見守り、時には一緒に遊び、困っている子の対応もします。担任一人でこなすには、とても大変そうに見えました。それでもあわてることなく対応している姿を見て、プロの技だと実感しました。保育士の一日の仕事の中でも大変なのは給食の時間です。食べられないものがあると箸が止まってしまうたり、食べることを嫌がったりする子もいます。それを上手く言葉で励まし、食べる意欲をもたせる保育士さんには圧倒されました。

とにかく、一日中目まぐるしく働いている保育士さん。しかし、仕事は子どもの世話だけでなく、日誌を書くなどの書類の仕事や、行事の準備など目には見えない仕事もあることを知りました。それを子どものいない時間にやるとなると、残業が生じることになります。本当に忙しい日々だとよく分かります。

私の母も保育士をしています。今は、六時間のパートですが、それでも責任のある仕事なので気が抜けな言いっていました。特にアレルギーには気を配っていると話していました。未満児の保育をして帰ってきた日は、「腰が痛い。」と言っていることもあります。抱っこをすることも体の負担は大きいのです。保育士は、体力も気力もいる仕事です。これほど保育士の仕事が大変なのは、仕事の内容に対して、保育士が少ないことに問題があるのではないかと思います。

保育士の基準が作られたのは一九四八年で、今から七十六年前です。戦後のベビーブームの時代に作られた基準です。七十六年といえば、私の祖父の年齢と同じです。この七十六年の間にどれ程の保育士の葛藤があったのか、今の私には想像もつきません。現在、少子化が進み、子どもの数が減っているとはいえ、支援を必要とする子、集団の中で生活のしにくさを抱えている子どもたちが増えてきているとニュースで見ることがあります。そうすると、保育士が側にいて見守ったり、援助したりといったマンツーマンの保育も必要となります。ますます保育士が必要とされるでしょう。人手不足はなかなか解消しないことが予測できます。

私は、保育士の人手不足を解消するためにも、保育士がどう働きたいのか、どんな保育を望んでいるのか、もっとその声に耳を傾けるべきだと思います。女性の社会進出が当たり前になっている今だからこそ、女性が自信をもって働き、安心して家族をもてる社会になるとよいと強く感じます。今回、保育士の基準が見直されたことは、保育の現状の改善に向けて一歩前進したと思います。今、頑張っている保育士さんたちは、未来の大切な子どもたちを支える素晴らしい仕事です。そして、私たちは、保育士のおかれている現状や、努力されていることを忘れてはなりません。明日の子どもたちの未来のために。